様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２９ 日現在

機関番号：４３１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１４２１５

研究課題名（和文）「イメージや動きの言語化」を促すダンス指導プログラムの考案

研究課題名（英文）Designing a dance instruction program that encourages the verbalization of images and movements

研究代表者
若井　由梨（WAKAI, YURI）

新潟中央短期大学・幼児教育科・講師

研究者番号：２０６４４０４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教育現場における教員のダンス指導の資質向上に役立てるための研究である。当初に実施の現職教員への実態調査によって、ダンス指導への苦手意識は指導者の熟練度によって要因が異なり、未熟練者は授業づくりや学習者との関わり方を困難に感じる一方で、熟練者は多様で独創的な動きを引き出す指導を困難に感じていることがわかった。またダンスコーチング現場やダンス領域に関連する研修会等への参与観察を通して作成された本ダンス指導プログラムは、運動活動中に言語化する作業を介入させるものであり、イメージや動きの特徴を言葉にする過程を経ることで、学習者が動きを多様化させ表現する際の有効な手がかりになることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
体育における「表現運動・ダンス」は種目特性から子どもの「心」と「体」を一体に捉えることができる領域として注目されているものの、その具体的方法は曖昧で教えにくく、指導法については戸惑いの声が多く挙げられる。これまでダンス指導に対する複数の不安要素が挙げられてきた中で、本研究では教師の熟練度別にみられるダンス指導への困難さを整理することができた。また困難さの一要因に関連して、イメージや動きを繋ぐ言語活動に着目したダンス指導プログラムは、学習者だけでなく指導者にとっても、動きの工夫を可視化していく際に有効的なアプローチとなりうることから、特に技能面の発展において今後の有益な基礎的資料となるであろう。

研究成果の概要（英文）：This study was designed to help improve the quality of dance instruction among teachers in educational settings. An initial survey of current teachers revealed that the reasons for a lack of enthusiasm for dance instruction vary depending on the instructor's level of expertise, with inexperienced teachers finding it difficult to create lessons and interact with students, while experienced teachers find it difficult to teach in a way that elicits diverse and original movements. Furthermore, this dance instruction program, created through participant observation of dance coaching settings and dance-related training sessions, involves the task of verbalizing during physical activities, and it was found that going through the process of putting images and movement characteristics into words provides an effective clue for students to diversify and express their movements.

研究分野：舞踊方法論

キーワード：ダンス指導プログラム　イメージ　動き　言語化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初，文部科学省から小学校・中学校学習指導要領が新たに公示された平成 29 年 3 月では，体育における「表現運動・ダンス」は種目特性から子どもの「心」と「体」を丸ごととらえることができる領域として変わらず期待されていたが，その具体的方法は曖昧で教育現場からは「わからない」という指導者の声も挙がるなど，指導法についての困惑が続いていた．継続的にダンス授業の実態を調査してきた中村（2010）は，中学校学習指導要領の意図に反して流行りの踊りの模倣や教師が振り付けた踊りの習得など「既存の動きの習得学修を取り入れていた学校も少なくなく，学習内容の質が十分に確保されているとはいえない」と報告し，また教師側のダンス経験の不足や実技の能力不足，ダンスに関する知識不足がダンス指導の実施を妨げていることも報告として挙げられており，現職教員を対象にしたダンス講習会の増加など様々な取り組みが行われている状況であった．

研究者はこれまでダンス指導に苦手意識を抱く現職教員および指導経験が浅く課題を抱える教員に対して,取り組みやすい効果的な教材や指導法の解明を目指して指導実践や研究活動を進めてきた（中島,2012；若井,2018）．以前より「ダンスの知識不足」「ダンスの経験値・実技力不足」といった現職教員の指導力の状況に対する課題点が多く指摘され，その改善策として講習会・研修会への参加を促す提案が多く挙げられていたが，松本（2017）が現職教員の実践力を高める方法としては,「大学のダンス授業経験の充実」と「教員に対する指導者研修会の機会の提供」と，双方に目を向ける必要があると述べており，松本（1994）も「長期的に見れば大学時の履修経験の差はダンス観，指導観，指導能力などに影響を与え，指導実践をおこなわせる原動力になる」とも述べているように，教職志望学生が学生時代にダンス領域の科目を履修することの意義が示されている．では，このような教職を目指す学生に対して，どのような指導実践力を早い段階から磨く必要があるだろうか．今後の基礎的資料を得るために研究チームで実施している継続研究では，小・中学校現職教員を対象としたダンス授業に関する実態調査を進めており，本研究ではこの実態調査の中で得た「イメージや動きを言葉にする難しさ」に焦点を当て，大学教育に求められる指導実践力について明らかにしていく．イメージやリズム，動きを介して仲間と交流を深め，創造的な身体表現を深めていくことができる表現運動・ダンス領域において,イメージや動きの言語化が果たす役割について着目した．

２．研究の目的

本研究は，ダンス授業に対する現職教員の課題意識である「イメージや動きを言葉にする困難さ」を手がかりにして，教員養成段階の大学教育において培うべき実践指導力について明らかにするものである．本研究では第一に，教員がダンス授業の指導時に困難さを感じる心理的要因についての手がかりを得るために教育現場の現職教員を対象としたダンス授業に関する質問紙調査を実施することとした．第二に，イメージや動きを伝達していく言語的アプローチの手がかりを得るためにダンスコーチングの指導現場を対象に実践者にインタビュー調査をすることによって，最終的にはダンス指導プログラムを考案することを目的とした．

３．研究の方法

本研究では以下の 3 つの段階を通してダンス指導プログラムの考案へと繋げていく．

【課題１：現職教員におけるダンス授業指導に関する実態調査】

現職教員を対象としたダンス授業の指導に関する実態調査を行う．質問項目の中には，指導経験年数，ダンス種目の実施状況や実施内容，指導時の困難さ等を問う質問を設定し，選択式項目や自由記述項目を組み合わせた質問紙調査によって回答を求める．選択式項目については単純集計を行い，データの分析には Microsoft 社の Excel を使用する．校種別や指導経験値別の群間比較には対応のない t 検定を実施し，有意水準は両側検定 5%および 1%未満とする．自由記述項目は KJ 法によって分類を行う．

【課題２：ダンスコーチング分野における指導方法についてのインタビュー調査】

教育現場と異なるフィールドである指導現場として，大学ダンス部におけるプロの舞踊家の言語的アプローチの指導方法に着目し，指導期間終了後に部員 17 名に対する半構造化インタビュー調査を行う．インタビュー調査では，部員の身体面に対する意識の変化や舞踊家の指導効果について質問し，プロの舞踊家が身体感覚や身体の動かし方についてどのような言語的なアプローチ用いて指導に活かしているのか，イメージと動きとの関連性に注目して質的に分析する．

【課題３：「イメージや動きの言語化」を促すダンス指導プログラムの考案】

課題１で明らかになった教育現場において現職教員が抱いている課題意識を根底に，課題２で対象としたダンスコーチング分野や身体表現に関連する指導者講習会・模擬授業の参観等，様々なフィールドワークによって得られた指導ポイントを考慮し,「イメージや動きの言語化」を促すダンス指導プログラムを考案する．プログラムについては，研究者自身が現職教員と議論

を重ね，教育現場の実態を考慮しながら指導案を作成していく．考案された指導案は小学校において試験的に実施し課題を検討するため，学習者によって紡ぎ出されるワークシートのキーワードや，キーワードから連想して表されている身体表現（個々の動き）を分析の対象とする．なお，本研究成果においては，現在投稿論文として分析中・執筆中のものも含め未発表のため，今後の課題を明らかにしつつ簡潔に述べさせていただくこととする．

４．研究成果

【成果１：現職教員におけるダンス授業指導に関する実態調査】

(1)回答者の基本情報

新潟県新潟市の全小学校 109 校，全中学校 62 校の各学校 1 名（体育主任）に依頼をし，回収率は小学校 53 名（48.62%），中学校 35 名（56.45%）であった．ダンス指導経験値とダンス指導に対する意識の関連性をみるため，対象者をダンス指導の熟練別に 2 群に分けたところ，回答者全体（n＝88）のうちダンスの指導経験が 10 年以上かつ毎年授業を受け持つ条件の調査回答者【熟練指導者 A 群】は 41 名（46.59%），ダンス指導経験が 10 年未満かつダンス授業を受け持つ年と受け持たない年がある条件の調査回答者【未熟練指導者 B 群】は 18 名(20.45%)の割合であった

(2)教育現場において採択されているダンス種目

小・中学校ともに表現運動・ダンスを総称すると「ダンス系」領域とされているが，「ダンス系」領域の主内容（種目）には「表現系」，「リズム系」，「フォークダンス」が位置づけられており，これらを「3 つのダンス」と総称している（表 1）．本調査において実施されている主内容（種目）は，小学校では偏りなく３つのダンスとなる表現系・リズム系・フォークダンスが採択されていた一方で，中学校ではリズム系に偏って種目が採択されていることが明らかになり，また小中学校の学校種および教師の熟練度を問わずいずれもリズム系が重点的に実施されていることが示唆された．

表１　「ダンス系」領域の学校種別における内容構成

学校種		小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校・高等学校
領域名		「ダンス系」領域			
		「表現運動系」			「ダンス」
		表現リズム遊び	表現運動	表現運動	ダンス
内容（種目）	「表現系」	ア．表現遊び	ア．表現	ア．表現	ア．創作ダンス
	「リズム系」および「フォークダンス」	イ．リズム遊び（中・高学年へのつながりを考慮し簡単なフォークダンス含む）	イ．リズムダンス（フォークダンス可）	イ．フォークダンス（リズムダンス可）	イ．フォークダンス
					ウ．現代的なリズムのダンス（その他のダンス可）

(3)現職教員における表現運動・ダンス授業指導に対する困難さ

表現運動・ダンス授業の指導に対しては総じて未熟練者の方が熟練者よりも多くの項目において困難さを感じており，特に〈授業づくりや指導法に関すること〉に関して，技能評価の視点と授業の構成方法，児童・生徒に向けた言葉のかけ方等，授業中の子どもとの関わり方に苦手意識を感じていた．一方で，熟練指導者は画一的な動きではなく多様で自由かつ独創的な動きを引き出したり即興的な表現に導いたりすることに課題を抱いていることが明らかになった（図 1）．

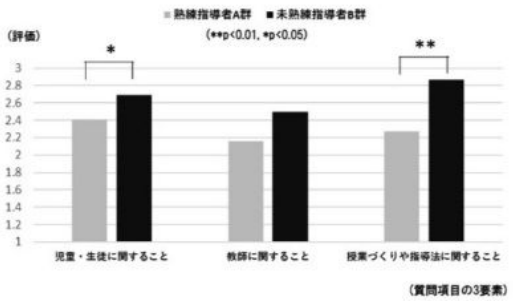

図１　表現運動・ダンス授業指導に関する困難さ

(4)ダンス授業に関する指導法獲得経験

大学時のダンス授業履修経験および講習会等の受講経験の効果においては，大学時よりも教職に就いて以降の受講経験の方が指導に活かされていることが示唆された．大学時のダンス授業が現在の指導に活かされている要素としては，「授業の雰囲気づくり，児童・生徒の動機の高め方」「見本として児童・生徒に見せる実技力」「人前で動きや表現を見せることに対する抵抗感の軽減」等に対して多く効果があると感じていることがわかった．その一方で，教職に就いて以降に受講した講習会等が現在の指導に活かされている要素としては，大学時ダンス授業履修経験の結果と同様に「授業の雰囲気づくり，児童・生徒の動機の高め方」を筆頭にしていたが，「単元計画や授業構成の組み立て方」「指導言語や児童と臨機応変に関わる指導方法」「見本として児童にみせる実技力」「児童の動きを評価する視点」等，多岐に渡り実践指導に活かされているこ

とがわかった.「その他」の意見としては「選曲方法」「活動例」の回答が見られた.

(5)ダンス指導法獲得の場（大学ダンス授業・講習会）への要望

「教育現場においてダンス授業を展開するにあたり，大学での授業，講習会等でどのような経験が必要と思いますか」と質問した自由記述には，回答をKJ法で分類した結果，①系統性のある学習課題と授業単元計画（44記述），②専門的な実技知識と実技力（14記述），③実体験による種目特性の理解（15記述），④具体的な指導方法の工夫（11 記述），⑤視聴覚資料および収集方法（11記述），⑥教育現場における実践経験系統性のある学習課題や授業単元構成（2記述）といった内容が現場から求められていることが明らかになった．これより，大学時のダンス授業においては学習目標と評価が一体となった指導法を学生に提供するだけでなく，授業全体の流れと展開構成も含めた単元計画の実践にも力を入れていく工夫が必要であることがわかった.

【成果２：ダンスコーチング分野における指導方法についてのインタビュー調査】

(1)調査対象の基本情報

ダンス部へのコーチングにあたった指導者はプロの女性舞踊家１名であり，当舞踊家は幼少よりバレエを始め高校時代よりイギリスへ留学し，ダンスの専門学校においてバレエやコンテンポラリーダンス，ダンス創作法等の様々な実践的な経験を積み重ねてきた．帰国後は劇場専属のダンスカンパニーに６年間所属し，研修生や準メンバーを経て正式メンバーとして精力的に活動し，プロの舞踊家として数々の舞台を経験した経歴をもつ者であった．一方で，インタビュー調査の対象者は,N 大学ダンス部に籍を置く18歳から22歳までの17名(平均年齢19.52±1.01歳，男子１名，女子16名）の部員であり，本研究の対象とした舞踊家によるコーチング期間以外の通常練習では，女性監督 1 名のもと創作ダンスに向けた基礎練習や作品づくりに取り組んでいる大学１年生～4年生であった.

（2）インタビューの分析結果

舞踊家の指導によって部員は「主観的な身体の感覚への気づき」と「客観的な身体の見せ方への気づき」についての効果を主に実感しており，その背景には舞踊家による言語的な指導にとどまらず，実演を多く含んだ視覚的・触覚的な要素も複合的に絡み合った指導の工夫によって効果が現れていることが示された.「主観的な身体の感覚への気づき」については,「身体への意識の集中」「重心・引き上げの感覚」など，舞踊家ならではの経験値を活かした指導により，意識の変容を促された．意識が変容していく要因には，イメージを膨らませる言葉だけの指摘のみではなく，実際に筋を収縮させる場所や方法を具体的に示してくれるような「具体的部位の感覚」にアプローチする指導が重なり合ったからこそ部員の意識に浸透するものがあり，言葉と共に実演があったからこそ，力の出し入れや明確に動く感覚の重要性を改めて理解することができたという効果が示唆された．また舞踊家が模範としての実演を何度も示したことにより，部員は具体的に舞踊家との動きがどのように異なるのか,「模範との対比による自己理解」を得ることができ，近づけていくべき理想の形を意識づけることができていた.

「客観的な身体の見せ方への気づき」については，舞踊家により振付された作品そのものの世界観や演出，創作過程の指導を通して，部員個々の踊り手としての「動き方の見せ方」と，振付や構成の魅力を含めた「作品としての見せ方」についての視野を広げるきっかけとなった．部員は，集団とした統一感とまとまりのあるように動きを大きく見せるための指摘を伝えられ，時には個々の体格に応じた動きの工夫ができる助言や指導によって個々の課題を認識し，身体面への意識をより一層高めていることが示唆された.

最後に，本調査結果のうちダンス指導場面における，背面・身体角度・身体全体などに対する「身体への意識の集中」，床を押す・引き上げる等の「重心・引き上げの感覚」，緩急をつけ大きく自分の体格に合った「動き方の見せ方」については，舞踊経験の浅い指導者にとっても言語的指導の形で導入することができる知見であると考えられる．一方で舞踊家の示範力や実技効果がなければ功を奏さないであろう「具体的部位の感覚」「模範との対比による自己理解」「作品としての見せ方」に関しては，本研究のプロの舞踊家の指導でなければ得られない効果であったと考えられる.

【成果３：「イメージや動きの言語化」を促すためのダンス指導プログラムの考案】

(1)ダンス指導プログラム（指導案）考案の背景

成果1，成果2により得られた知見に加え，ダンス系領域に関連する指導者講習会への参与観察，現職教員による公開模擬授業および協議会参加によって，理論と実践の往還となり具体的なプログラム作成に思考を重ねてきた．また幼・保・小連携を踏まえ小学校の前段階である幼児教育分野にも着目し，対象者に合わせた言語化に繋がる身体表現の手がかりを得るために，運動遊びや表現遊びを実践する指導者研修会においても参与観察を行った．これらより，プログラム内における導入場面から展開場面へのスムーズな進め方や段階的な言語的アプローチを具体的に参考にすることができた．以下，研究者自身が作成した「イメージや動きの言語化」を促すダンス指導プログラムについてである．なお，これらは体育科教育を専門領域とする研究協力者と，現職の小学校教員と共に児童の受け止めを想定しながら微調整して作成に至った.

(2)ダンス指導プログラムの実践設定

研究者が作成したプログラム（指導案）をもとに，小学校にて勤務する現職男性教員が指導者となり，小学校 6 年生の 2 クラス（各 28 名）を対象に表現運動の授業を実施した．2 週間の期間の中で配置された体育授業を活用し，各クラス 4 時間分を本プログラム実施に当て,表現運動単元として位置づけた.

(3)ダンス指導プログラム（指導案）の概要

①4 時間構成の内容

前半 2 時間は基礎的な技能を習得する内容として位置づけ，1 時間目を運動課題の「走るー止まる」，2 時間目を運動課題の「走るー跳ぶー転がる」とした．本課題の選定理由は，全国ダンス・表現運動関連の授業研究会が提示する教材において，〈対極の動きの連続の手がかり〉として初段階で取り上げられることの多い推奨教材であること，またプログラムの学習者として参加した対象児童ら自身が小学校 4 年生の表現運動において実践経験のある課題でもあるため追体験となり，学習者にとって取り組みやすい課題であると判断したためである．後半 2 時間は，前半 2 時間で学んだことを生かしながらグループ活動へと移行した．個々の動きから学んだ表現方法から集団に変化することによって，より表現方法が広がり仲間と関わって影響し合いながら多様な質感の深まりが期待できると考えたからである．最後の 4 時間目には各グループの作品発表を設定し，客観的な見せ方について他者を通して学ぶ目的とした.

運動課題「走るー止まる」「走るー跳ぶー転がる」を実践する中でも共通した表現の工夫については,〈空間のくずし〉〈リズムのくずし〉〈身体のくずし〉として設定した．1，2 時間目はこれらのポイントを指導者が実演で説明し，学習者がイメージや動きに対する主観的な感覚を言語化していく作業を通して，より自身の動きの感覚を自覚し，質感を深め，動きを多様に表現できるようになることを目的とした.

②データの収集

本授業におけるデータは，学習者へのワークシートの記入や形成的授業評価に回答してもらうことで主観的評価を得ること，また授業の様子を撮影し記録することで客観的評価を得ることの両側面から収集した．ワークシートにおいては，イメージや動きを言語的に表したキーワードや授業の感想を記載してもらった．指導者にはプログラムがすべて終了した後にインタビュー調査を実施し，授業を実施した立場から,プログラムを実施した感想を振り返ると共に，本プログラムの効果や課題点について，研究者とともに検討した.

③学習者の様子や感想

初めは表現運動そのものに対するイメージが薄く，授業の容量が掴めずに戸惑いが見られていたが，指導者の全身を使って思い切った実演や学習者と掛け合うコミュニケーションによって開放的な雰囲気となっていった．動きの工夫のポイントを理解するにつれ，動きを様々に表現していく楽しさを実感したり，仲間と表現したいイメージを相談し合ったりしながら動きにしていく過程に，面白さを感じている様子が見られた．テーマをもってグループでひと流れをつくり，試行錯誤の末に創った作品を発表できた最終回では，満足感や達成感を味わうことができたことが感想からも確認することができた．本研究成果報告書においては簡易的な記述にとどめるが，学習者にとって満足感や楽しさを見いだせるという点においては，本プログラムへの肯定的な様子が見受けられた.

④プログラムの改善と今後の課題

本プログラムを試験的に実践したのちの課題点は，以下の 2 点である。「言語化する」という捉え方において，学習者のイメージや動きを感覚的に感じ取る力と，感じ取りかつ言語化する力には隔たりがあるということだ．学習者の発達段階によっては，多様で具体的な質感は想像できるものの言葉にする国語力も関連する．加えて，文字にして書くという作業もまた，一つのハードルに繋がる課題とも捉えられる．作業時間は体を動かす活動時間の確保にも影響を及ぼしてしまうため，言語化をする方法や介入のタイミングは今後改善していく必要がある.

次に，プログラムに割く時間数である．単元を組むうえで学習者の知識や技能面の蓄積を考慮すると，4 時間では学習者の変化を見とることが難しい．最後に作品を互いに見せ合う活動を入れることは，学習者同士が個性的な表現を認め合う価値のある時間となる．しかし本プログラムでは言語化する介入の作業を主眼としていたため，創作する時間の割合をどのくらいとるべきかについては検討の余地がある．毎授業における目的は何であるべきか,優先順位を見極めつつ,プログラムを通して必要な授業実数を再度検討していく必要があるだろう.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 若井由梨、山崎史恵、吉田重和	４．巻 第21巻(2)
２．論文標題 教育現場における「表現運動・ダンス」指導時の困難さについてー新潟市内小・中学校現職教員への実態調査をもとにー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 新潟医療福祉学会誌	６．最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 若井由梨、山本悦史、上田純平	４．巻 第21巻
２．論文標題 プロの舞踊家によるダンス指導が大学ダンス部員にもたらす効果：身体面に関する効果に着目して	５．発行年 2024年
３．雑誌名 大学体育スポーツ学研究	６．最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 若井由梨
２．発表標題 ダンス授業指導法の獲得経験とその効果 ： 現職教員への調査をもとに
３．学会等名 第20回新潟医療福祉学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 若井由梨、山本悦史、上田純平
２．発表標題 舞踊家によるダンス指導が大学生ダンサーにもたらす効果ー大学生ダンサーの意識に着目した事例研究ー
３．学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 若井由梨、山本悦史、上田純平
２．発表標題 舞踊家によるダンス指導が大学生ダンサーにもたらす効果ー舞踊家の意識に着目した事例研究―
３．学会等名 新潟県体育学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山崎　史恵 (Yamazaki Fumie)		
研究協力者	吉田　重和 (Yoshida Shigekazu)		
研究協力者	高田　大輔 (Takata Daisuke)		
研究協力者	山本　悦史 (Yamamoto Etsushi)		
研究協力者	上田　純平 (Ueda Jumpei)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関